

關羽祠廟の由來並に變遷 (一)

井上以智爲

一、序 說

二、唐代創草期

三、宋元發展期(以下次號)

其一 宋代の發展

其二 元代の發展

四、明代最盛期

五、清代整頓期

六、結 語

一 序 說

近代支那に於て官民上下を通じて最も弘く尊奉祭祀されて居るのは關羽である。關羽は三國時代の蜀主昭烈帝に事へ忠勇武烈の點では比類稀有の功臣名將として古來崇敬甚だ篤く、歷朝封號を贈與され殊に明末に及んで關聖大帝に追封された。爾來關羽は一般に關帝と稱し、その祭祀場は關帝廟と呼ばれるが、尙ほその舊號に因みて往々漢壽亭侯

廟・關王廟又は武安王廟とも稱せられる。關羽祭祀の目的は多様ではあるが、大別して之を三種となすことが出来る。騷亂を鎮撫し又は鎮撫の援助をなす武神たることがその一、寺觀保護の任に當る伽藍神たることがその二、而して財神として士民生活の指針たることがその三である。謂ふ所の關帝廟神位は必ずしも此れ等三種に截然適確に區別し得るとは限らず、或は甲より乙に變化し或は甲乙同時に併存する場合も尠くない。而して此れ等關帝廟に就いて攷察するに當りて之を官私の兩種に大別するを便とする。

關羽は明清時代に於て恰も武神を代表するものと看做され、文神と仰がれる孔子とは概ね同格の地位に置かれ、時にはその祠廟は武廟とも稱せられた。清朝は北京地安門外の白馬關帝廟を以て官祭祠廟となし之を祀典に列し各地方官祭祠廟の本宗たらしめ、この本宗に對して地方各縣毎に官祭支廟たる關帝廟を設置する。各地の官廟中、殊に當陽縣西の「關帝陵廟」、洛陽縣南の關羽「塚廟」及び華陽縣南の「華陽墓廟」は關羽墳廟として、又解縣南の「關聖廟」は關羽發祥地祠廟として、何れも史的背景に富み歴代特殊地位を占めて篤く尊崇せられ、各種關羽祠廟中代表的のものである。而して此れ等官祭祠廟は毎歲春秋二季並に五月十三日の聖誕日に官祭を施行する。以上の官祭祠廟以外に尙ほ民間にも武神としての關羽を奉祀する私的關帝廟の尠からず存在することは贅言を要しない。

寺觀の守護に任ずる伽藍神廟は武神としての關帝廟が何れも單獨に存在するに對して、必ず佛寺又は道觀に附屬する。元來佛教はその初期印度時代から既にその守護神は存在するが、東漸以後寺廟守護に當る獨特の神祇が支那に於て發生し、之を伽藍神又は單に伽藍とも稱する。此の風習はやがて道觀にも採用され、而して道佛兩教とも概ね關羽

を以て伽藍神となし、之を奉祀する關帝殿又は伽藍堂は普通に之を寺觀の地域内に建立する。當陽縣西の玉泉寺内關羽祠廟は支那佛教伽藍神廟の濫觴であり、普陀山普濟寺・廬山歸宗寺・北京雍和宮の關帝殿は現代に於ける弘義の佛教伽藍神廟の適例であり、北京城外の白雲觀・東嶽廟、城内火神廟の關帝殿及奉天太清宮の老聃殿は道教的伽藍神廟の代表的なものである。^①而して四明天童寺天王殿内の護法神・天台山國清寺伽藍堂内の神位は未だ詳にするを得ないが多分何れも亦關羽を祭祀するものであらう。尙ほ特殊の殿宇なく本尊の侍者の如く殿宇の入口又は一隅に安置せられる關羽像も亦同様に伽藍神と看做し得るもので、大同上華嚴寺・石城山彌勒殿の如く各地の祠廟に於て屢寓する處である。斯く寺觀の守護に任ずる伽藍神も亦後に述べるやうに要するに弘義の武神に外ならない。

財神として士民生活指導の任に當る關羽は武神としてよりも一層弘く祭祀されてゐる。現世の福祉昌盛を只管願望する漢族は日常喜・貴・福・財の諸神を祈念することを怠らず、就中財神を尊奉すること篤く、諸財神中特に關羽は上下を通じて洽く之を崇敬してゐる。凡そ各地に存在する關帝廟は其の數甚だ多く清末北京城内のみにて約二十、今は杭縣に屬する錢塘縣は六、^②而して現滿洲國遼陽縣三十、同錦縣十九、寧遠州十六等であつて、其の數の上からは此れ等各地の諸種祠廟中一頭地を抜いて居り、その中には武神としての祠廟も多少存するであらうが、その大多數は民俗信仰の結晶たる財神としての關帝廟であり、關羽信仰が弘く全漢族の間に普及透徹して居ることは想像に難くない。

50

斯様に騷亂鎮撫の威力を有する武神は寺觀を守護して兇敵群邪を擊攘し得るは極めて當然のことであり、武神から

伽藍神となることは唯その威力の限定特殊化に過ぎない。而して財神として關羽の崇敬せられる由來については或は自己を滅却して他に施與することを拒まない無慾恬淡の性格からとも解せられるが、要するに招福除災じて士民生活の安定昌盛を保證するは之れ又武神平時の餘瀝とも視られる。かくて武神から伽藍神となり或は又財神となるのは、畢竟國家政教の方面に關係深い武神から士民昌盛の指針たる財神への變相であり、儒教的から道教的への推移であるが、時には又財神から武神への還元的更改もあれば財神即武神の如き一神二相の場合も尠くない。關羽は往々關老爺又は關菩薩と呼ばれるのは、概ね士民の景慕措く能はざる此の道教的色彩濃厚なる財神の別名であつて、その崇敬信心の旺盛なることを反映する。

以上は清朝時代に於ける關羽祭祀祠廟の概要である。想ふに民國の現状も亦大略之と同様であらう。但し民國三年武神としての關帝廟に宋の岳飛を合祀して之を關岳廟と改めてから、形式的には官祭關帝廟は消滅した筈であるが、現にその多くは依然關帝廟と稱し實質的には毫も異るところはない。而して遼陽縣に於ける關帝廟は上述の様にその數三十に及ぶが、その多くは現に國民學校に代用されて祠廟専用ものは甚だ尠いから、^③興亡隆替迅速なる現代支那に於ても亦遼陽縣と同様に、各地關帝廟の變遷が甚しいかも知れない。支那に於ける關羽祠廟の由來變遷を攷察するに當り、主要資料となる代表的關帝廟は次の通りである。

一、白馬關帝廟

北京地安門外西

官祭廟

武

廟

本宗

二、關帝陵廟(顯佑廟)

或曰忠義廟・塚廟

湖北省當陽縣城西五支里

同

同

支廟

佛教(佛僧奉仕)

三、解縣關帝廟 或曰關聖廟	山西省解縣城西門外百步許	同	同	道教(道士奉仕)
四、洛陽縣塚廟 或曰前將軍關公墓・關林	河南省洛陽縣城南十五支里	同	同	
五、華陽縣關帝墓廟	四川省華陽縣南萬里橋畔	同	同	
六、月城關帝廟 或曰前門武安王廟・漢前將軍廟	北京正陽門月城右側	私廟	財神廟	道教(道士奉仕カ)
七、顯烈廟	湖北省當陽縣城西三十支里玉泉寺	同	伽藍神廟	佛教(佛寺所屬)

註

- ① 奉天太清宮の老爺殿は太上老君堂・玉皇樓と共に同宮域内中央に位置する主要三大殿宇中、入門第一の要地を占めて居る。現在同宮の關羽神位は單なる伽藍神か或は更に進展して財神として奉祀されてゐるか未だ之を適確にするを得ない。北京地安門外火神廟は道觀の一種かどうか未だ詳にしないが道觀と同系統に屬する民族信仰の代表的なものである。
- ② 民國以後錢塘縣と仁和縣とを合併して杭縣となした。
- ③ 戊辰(昭和三年||民國十七年)烱刊『遼陽縣志』

二 唐代創草期

關羽を一般に祭祀する由來は謂ふまでもなくその偉大なる人格と君國に對する功績とに基因する。彼が始めて劉備に事へたのは後漢靈帝中平元年一八四である。一時事敗れて敵帥曹操の下に留寓するが、偶々建安五年二〇〇白馬津で袁紹旗下の勇將を斬つて曹操の爲めに貢獻する處あつたから、曹操の畫策で漢壽亭侯に封ぜられた。其の後劉備の下に

復歸するを得るが、吳主孫權の爲めに漳郷湖北省當陽縣に於て殺害される建安二十四年九一に至るまで、前後三十年間に亘つて、關羽は主君劉備の爲めに具に忠勇武烈の赤誠を盡した。蜀漢の後主劉禪が景耀三年二六彼の功績を賞揚して壯繆侯を追諡した。爾來壯繆侯關羽は忠勇武烈の龜鑑として洽く讚美景仰されてゐる。

關羽の武神として祭祀される由來を攷察するに、先づ武神廟に從祀されることから始むるを便とする。武神祭祀は唐太宗貞觀年間太公望呂尙を主神とする太公廟を以てその嚆矢とする。太公廟は其後玄宗開元十九年七一文神たる孔子廟に準じて京師並に各地方州縣にも創設され肅宗上元々年七六武成王に封ぜられてから之を武成王廟と改稱する。德宗建中三年七八關羽は武成王從祀の古今名将六十四人中に加へられ蜀前將軍漢壽亭侯として始めて官祭される。^①然るに從祀は僅に五年間のみで德宗貞元二年七八之を中止し五代の頃一時的に復活することもあるが、其の後永續するのは北宋以後で即ち仁宗慶曆一〇四一四一から明初一三八三八に至るまで約三百年間繼續する。斯様に中唐以來關羽は文神たる孔子に準じて京師並に各州縣の官祭武成王廟に漢壽亭侯として從祀されることは、後年關羽信仰が普及してその祠廟が各地に流布する一助となり、漢壽亭侯てふ名稱は官私とも屢々使用される源流をなし、而して文宣・武成兩神が對等であることは、近代孔・關兩廟を相對的に同格視する傾向の發生する因由をなしてゐる。

武神として武成王廟に從祀されると略同時に關羽は又單獨にも祭祀される。關羽生前の功績を賞揚して官民から崇敬され一般的に奉祀されるのは、何時代に始まるかは未だ之を明確にするを得ないが、現に關帝祠廟として最も古い沿革を有するものは、湖北省當陽縣城西三十支里に在る玉泉寺内の顯烈廟である。但し當陽縣には關羽祭祀の代表的

祠廟は二箇所ある。一は上記の顯烈廟で伽藍神廟の嚆矢をなし、他は同縣城西五支里に在る關羽墳塚に設けられた陵廟即ち關帝陵廟であり、^②現に兩廟とも存在する。前者は寺域内の伽藍神廟即ち一伽藍堂に過ぎざるに反して、後者は代表的地方官祭廟としてその規模外觀の上からは到底前者とは比較にならない程弘大である。然し前者には隋代玉泉寺創建に由來する附會説があり唐以來の傳統も明白であるが、後者は漸く明代中期に至りて告成するから創業變遷の上から視れば、後者は前者から分離派生したもので兩者の間には本末宗支の關係が存在する。

玉泉寺は天台智者大師が隋文帝開皇十二年頃創業した。同寺の地域は漢代の漳郷に屬し、漳郷は偶々關羽終焉の地でもある關係から、やがて同寺と關羽とを結び附けて靈異的附會説が発生する。玉泉寺創業について誌す初唐道宣の智顛傳に「其地昔唯荒險。神獸蛇暴。創寺之後。快無憂患。」とあつて多少靈異的色彩のあることは、殆時代を同じくする天台山國清寺の開基説にも視られる當時の一般風潮であるが、その關羽との關係については未だ毫も説き及ばない。此の點については中唐玄宗開元十年^{七二}張説の「玉泉寺大通禪師碑」^④も亦同様である。斯くして尠くとも中唐玄宗の頃に至る迄は未だ同寺に關する關羽靈異説は發生しなかつた様である。同寺に關する關羽靈異説は數種類あるが、現存する最古の文獻は中唐德宗貞元十八年^{八二}董挺の「重修玉泉寺關廟記」^⑤である。同文獻中には通説と一致を缺く點もあるがその主要事項を擧げると、智顛が天台山より此の地に來りて一夜喬木の下に安坐する時偶一神靈と會見したことを誌して「急與神遇云。願捨此地爲僧坊。」とあり、謂ふ所の神は既に之より三百五十年以前に此の地で歿した關羽の神靈であつて、神靈の領有する此の地を智顛に提供して寺殿を建立する主旨を明かにし、且つ神靈の威力を述べ

て「嗚呼生爲英賢。沒爲神靈所寄。此山之下。邦之興廢。歲之豐荒。於是乎繫。」とありて、伽藍を奉獻する關羽の神靈が國土の興廢豐荒をも左右し得る威力を有する由來を誌して居り、尙又寺内顯烈廟の源流に就いては「聞公遺廟存焉。……祠廟墮毀。廢懸斷絶。」とありて、同廟は尠くとも數十年以前即ち玄宗の頃から存在する様に推定される。蓋し關羽が始めて武成王に従祀される徳宗建中三年^{七八}以前に單獨に官祭される筈はなく、單獨私祭の濫觴も亦それより餘り遠からざるべく、顯烈廟の玄宗時代に存在するのは多分その頃の創設であり、私廟造營の嚆矢をなす様であり、而して此れ等官私兩廟の間には直接何等の關係はないにしても、私廟に嗣いで官廟の發生するのは極めて自然的と想はれる。此の碑に就いては南宋王象之の『輿地紀勝』^⑥に、歐陽脩の『集古錄』に謂ふ所の「關將軍祠堂記」と同一であると誌してあるから、北宋時代から早くも識者の注意を惹いて居り、且つその靈驗に就いては北宋神宗元豐四年^{八一〇}張商英の「重建關將軍廟記」^⑦及び南宋志磐の『佛祖統記』にも明記されるから、中唐徳宗の頃から宋元^⑧に互つて弘く流布することが窺はれる。

然るに關羽祭祀私廟創建の目的は、當初より玉泉寺を守護する伽藍神となすにあるかどうかは、未だ之を明白にするを得ないが、上記貞元十八年董挺の碑文中伽藍神について明記されてゐない點から視て、同廟創設以後更めて關羽を玉泉寺伽藍神となしたものと想像せられる。國清寺・玉泉寺等の創業に關する靈異説の端緒は既に初唐道宣の『高僧傳』にある程であるから、更にその説から進展して玉泉寺々城が關羽終焉の地と關係あることが明白となれば、兩者の史的背景に因みて玉泉寺奉獻に關する關羽靈異説が創造され、或は同寺々城に關羽祠廟の創建されることは極めて

て自然のことである。かくて玉泉寺關羽祠廟が創建された以後、此の勇武なる神明が從來から佛教伽藍の守護神であつた印度式伽藍神以外に同寺獨特の支那式伽藍神となつたもので、その創造期は董挺の碑文の出來た貞元十八年よりも以後であり、上記元豐四年張商英碑文中に「永護佛法」とあつて既に伽藍神たることが明白であるから夫れよりも以前であつて多分晚唐初宋の交であり、或は唐武宗の廢佛政策が撤廢されてから以後の佛教復興の際であつたかも知れない。斯様にして創造された玉泉寺伽藍神が支那佛教伽藍神の濫觴をなし、その本宗となると共に、やがて關羽は又道教の伽藍神ともなるのである。但し支那伽藍神は關羽のみとは限らない。五代吳越國開運二年^{九四}梁の顧野王を伽藍神となした法運寺の實例もあるがそれは寧ろ例外に屬し、當時既に關羽が支那佛教伽藍神となつて居つたことは、やがて南宋時代即ち金大定十三年^{七一}玉泉寺伽藍神の顯烈廟が天下伽藍神廟の本宗をなし、更に近代伽藍神も亦概ね關羽であるといふ^⑪、その變遷の大勢上から攷察して容易に首肯される。而して關羽が支那に於ける寺觀伽藍神の濫觴をなすことは、關羽祭祀の變遷史上劃期的緊要事である。

斯様にして三國末期壯繆侯を追諡されて民俗的景仰を集中した關羽は、中唐に至つて一方武神として武成王廟に從祀されると共に、他方玉泉寺々域に同寺創業と深き關係ある神明として祭祀せられ、やがて同寺伽藍神として士民の尊崇を高潮する端緒となつて居る。而して武神としては主神呂尙が文神たる孔子と同格の地位を占めるから、之に從祀される關羽は同僚の諸葛亮・張飛等と共に、勿論孔子と同格の地位にあるものではないが、宋代に至るとその地位が昂揚して孔子と同格ともなり儕輩より一頭地を抜くのである。要するに唐代に於ける關羽祭祀はその發達の搖籃期

であり、而して玉泉寺以外にその單獨祭祀祠廟が存するかどうか未だ之を詳にしない。

註

- ① 『大唐郊祀錄』一〇。
- ② 關帝陵廟は清康熙庚辰^{三年}孟秋月訂『關聖陵廟紀略』に誌す名稱である。同廟は明神宗萬曆二十二年頃「顯佑」てふ廟名を賜與される。尙ほ同廟は關忠義廟(『大清一統志』)又は塚廟(『清朝實錄』)とも稱せられる。
- ③ 『唐高僧傳』二二、其傳
- ④ 『全唐文』二三一。
- ⑤ 『全唐文』六八四、董挺撰・荊南節度使江陵尹裴公重修「玉泉關廟記」中に玉泉寺創建を陳光大中と誌し、南宋王象之の『輿地紀勝』(七八、荊門軍)も亦同様であつて、通説たる隋開皇十二年よりは約二十五年程古くなて居る。通説は現存最古の資料たる『唐高僧傳』に基いて推定され比較的信憑するに足り、『佛祖統記』(六、天台智者)も亦同説である。董挺は約二百三十年以前に遡つて記述して居り當時既に創建期について異説のあつたことが窺はれる。
- ⑥ 『輿地紀勝』七八、荊門軍。碑記。
- ⑦ 『關聖陵廟紀略』三。及び『山右石刻叢篇』二二。
- ⑧ 清・俞正燮『癸巳存稿』九、「關聖事輯後識語」に唐宋范攄の『雲溪友議』中から「或言此祠(玉泉祠)鬼助土木之工而成。祠有三郎神。卽關三郎也。」を引用して玉泉寺創建の神靈は關三郎であつて關羽にあらずとなし、「蓋關三郎之目。始於唐。關聖之説。追改古傳則成於宋。」と誌して、關羽の創業靈異説は宋代の改造なりと結論を下して居るが、然し范攄は唐宋懿宗咸通頃の人であるから、その説は唐宋の一代表説と視られるが、約六十年以前の貞元十八年の董攄説を破却し得るものとは判定し得ない。若し范攄にして董挺説を知るならば必ずその批判を加へてから關三郎説を掲げたに相違ない。『癸巳存稿』の著者も亦同様に董挺説に論及しないで、范攄説のみに據つて論斷を下してゐるのは筆者の承服し得ない所以である。

⑨ 『江蘇金石記』七、吳越開運二年（九四五）「法運寺感夢伽藍記」。

⑩ 『山右石刻叢編』二一「慈相寺關帝廟記」に「大定十三載：（慈相寺澄公）曰。今茲天下伽藍奉此者（關羽）爲護法之神。」と誌して、湖北省當陽縣の玉泉寺から遠く山西省中部の平遙縣慈相寺へ伽藍神を勸請分身して、天下伽藍護法神となすことから推して、當寺玉泉寺伽藍神廟が佛教伽藍神の本宗をなして居ることが知られる。

⑪ 『關聖陵廟紀略』二、郁世燮・「伽藍辨」に「伽藍神不拘」。而以關帝作伽藍者。大槩十八九。」